

真生

第四卷 第七號

□ 人生の生活は二つの重大な問題がある。一は永生の問題であり、二は價值生活の問題である。

□ 永生の問題は自己生存の欲求であつて、死に對する超越の自覺であり、價值生活の問題は自己生存の發展であつて、理想實現の要求である。

□ 故に永生の自覺なき人生は眞に永劫の望みなく、價值に生かない人生は眞の喜びがないのである。

□ 然し永生の自覺とは何であるか、それは自分が天地と共に不滅であるとの自覺である。吾等は宇宙の本源より來るもの、換言すれば吾等は宇宙の現はれ宇宙大精神の表現であることを自覺するにある。

□ 凡そ吾人は宇宙を離れて存在するものでなく、又宇宙も吾等を離れて存在するものでない。宇宙と吾等とは本來一体であり不二である。

□ されば宇宙の不滅なる限り我も亦不滅であり、宇宙の永劫である限り我も亦永劫である。而て永生の自覺といふは即ち此の永劫不滅の自覺である。

□ 而て價值の生活とは何であるか、それは此の永生の自覺より更に一步を進めて同体大悲の自覺に生きていることである。換言すれば一切を愛するの慈悲的生活である。慈愛なき所に眞の價值的生活はない。

□ 然に友よ、吾人の生活は果して眞に永生の自覺があるか、而つて又果して吾人の生活は眞に至愛の生活であらうか。飯を喰つて葬式を待つのみが眞の人生ではないではないか。(念)

現 實 へ 還 れ

□ちとばかり自分の思想上に發見するところがあると、そら信仰を得た、そら體驗だと有頂天になつて喜ぶ、けれど其麼時には其一つに執して居るのであるから、「大悟十八、小悟數を知らず」と云はれた古哲の言を少しは思ひ出すがよい。信仰といふのはそんな犬が歩いて棒にあたるやうなボツカリしたものではない。
 □信仰といふものを其麼妙な天來的な不可思議なものに祀り上げて、それをだん／＼深く追究してゆくのが宗教であるかのやうに云ふのは一の享樂主義である、そして「得たりと思ふは得ざるなり、得ざるが得たるなり」などと自分の心が晦く行爲の不徹底なのを辯護かしに落付いてゐるのは腹立しい程である。
 □それでは一体信仰とはどういふのであるか。
 □月を見て、一体どう見るのが本當に月の美を味ふものかと争てゐた者が、皆な月に照らされてゐたことを知つて、あつたらぬ議論に花を咲かしてゐたと氣がつくやうに。救ひが什うの、往生がどうのと云てゐるのでなく、今自分は何をなしてゐるか、又何を爲すべきかが信仰である。
 □信仰は一本勝負である、一本一本が勝つか負けるか何れかである、一事一行が「心を弘誓の佛地に樹て」であつたら如来様のみ心に相應した信である。如来様の心を離れてゐた時は、明かに「本願に順じて居らぬ」失墜の機である。
 □嘗て百萬金の長者であつても現在無一文なれば明かに無産者である、昔の信仰は誇りにはならぬ、現在の我が現在無一文なれば明かに無産者である、昔の信仰は誇り
 □「佛と衆生と彼此の三業相捨離せず」自己の人格、自己の全生活の上に佛の三業が現成してゐるとき「佛我れに在りて生けるなり」である、眞に如来を中心として全自己が顯現し、如来の中心に向て一切が進んでゐるとき、何物にも障げられず、何物をも破てゆく力がある、此力に伸び切り、此大生命ながらの現はれが信仰である。(尅子)

現實へ還れ
 眞我の修養
 見佛に就ての疑難
 おー念佛よ
 如来我を救ひ給ひぬ
 虛無時代の詩
 入信二章
 内歡如實
 私の昨今

尅	東	土	山	佐	眞	同	氏	觀
子	光	屋	口	藤	野		川	
人	山	觀	常	忠	志		俊	
	道	照	義	岐	雄	人	徹	道

眞我の修養

東 光 山 人

一、我とは何であるか

一口に我とは何だといへば、我とおれだと答へるものがある。乍然其のおれだと答へるものは一体如何なるものであるかと考へて見ると、おれと云つたのはおれだとハッキリ判つてゐるかそれかと云つて、影や形を以つて見るこのできるものではない。乍然自分が居ないかと云ふならばそれは確にこゝに居るといひうる自分そのものがある、然し自分が此の世に生れて來てからとか、自分が死んだあとにと云ふ自分は主として此の肉身をさして、生れたの、死んだのと云つてゐる。かといつて、肉身が自分かといはるれば、肉身は私の肉身であつて私ではない、然ば私はかう思ふとか私はこうしたいとか云ふ方面を見ると、我とは心であると思ふのである、然ば心が自分かといへば自分の心、自分の身といふ様に見て來ると心は自分の心であつて自分そのものではない。

「我は眼で見ることも、耳で聞くことも又鼻で嗅ぐことも口で味ふことも手で觸れることも出來ない乍然眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、口で味い、手で觸れてゐるものそれは我である」と昔印度の哲人がウパニヤツドの中に云つてゐるが確にそれこそ我である。然ば我とは五感の作用で知ることのできないものではあるか、かうして五感の作用で色々のものを知りつゝあるもの、それは我だといへると思ふ。従つて我とは我によつて知らるべきものでなく、一切を知りつゝあるものとして知る外はない。即ち感

ぜらるべきものではなくて、感じつゝあるものそのものである。今日多く使はれてゐる言葉でいへば嚴密な意味では主觀そのものである。世の中に有るとか無いとかいはれるものはすべて此の主觀に影した客觀物に就てであつて、主觀そのものゝ存在については普通の意味での存在と同じ意味で考へ顯はさるべきものでない。従て世人が此の主觀我を客觀の上に思い浮べやうとすることは全くの誤りであることを見知らねばならぬ。而して又主觀の存在が客觀を離れて存在するかどうか、少くとも客觀を離れて主觀の存在を知ることができなく、又主觀を離れて客觀が存在するものではない。之を嚴密に觀察すれば私共は客觀に即することによつて主觀あることを知り、主觀に即することによつて客觀の存在を知るのであつて、主客相待つて兩者の存在を知るといはねばならぬ。

二、宇宙と我との關係

乍然宇宙の一切が我が主觀の中に影じ來るとき、私共はこゝに時間空間に渡つて、實に宏大無邊なる天地の悠久として展開してゐるのに驚く。「何と云ふ宏大なるこの天地であることよ！」と私共は實に驚嘆せざる得ないは此の天地の不可思議宏大にして而も無邊なるを感ぜざるを得ないのである。今自分の立つてゐるところから暫く天の大空を指して星の彼方を眺むればその星の向ふに果して終りがあるのであらうか、それは恐らくどこまでもはてしなき廣さのものではあるまいか、考へに考へても私共の考へではこれが宇宙のはてであるといふことを考へうことはできない。而もかゝる廣大にして無邊なる大宇宙はいつの昔から始つたのであらうか、之を百年千年萬年と幾千億萬年の昔に歸へるも之が天地の始まりであると定むべき始まりがあらうとも思へぬ。而かもかゝる悠久たる天地の事に於て人生の一生

はさながら大海の一滴であり、たゞ一瞬の生命である。

三、眞我の絶大

乍然之に反して自分を中心に宇宙を眺むれば一切の萬象は又不思議にも自分の心の内にはいつてしまふ。見よ如何に宇宙は大なりとも其の大なる宇宙そのまゝが自分の心の中にはいつてゐるではないか。然ば其の宇宙を大なりといひ、又その宇宙を悠久なりと云ふといへども、それらのすべてを我は其の心の中に入れてゐる。言かゆれば宇宙は宏大にして無邊なりといへども、其の宏大なる宇宙も自分の心の外に存在しているものではない。然ば眞實の我は眞に此の宇宙をも包括した自分そのものであるではないか。永遠の生命も無限の向上も一切を包括して之を見てゐるものは即ち此の心である。然ば此の我こそは一切を見、一切をもつゝんだ純粹主觀そのものといふべく其の中の客觀そのものも此の中に抱擁せられて主客一体であつたのである。だから又それは一切の宇宙を内容とせる我自身ともいへる。

而も此の絶對主觀の中に顯はれてゐる客觀の世界を見るに、此の間自ら天に晨星あり地に山河ありである。人間の中に甲あり乙あり、丙ありて其の中の一人として、身心をもてる自分があることを認めざるを得ない。而も其の自分が此の大なる宇宙の中に於て外より見たとき如何に微少なる力なきものである事よ。乍然逆に我を中心として、考ふれば此の肉体の上には確かに大海の一滴にも過ぎない私が直に此の大宇宙をも自分の心の中に包擁している心の所有者であるといふことは何といふ驚く可き不思議なことではないか。言かへて見れば同じ我ではあるが時によると小我としての我である時と大我としての我であるときがある。

四、眞我の生活

して見ると私共の人生の中に何れを眞の我とすべきであらう之を外より見れば宇宙の中の一員としての我がいることも確かであるが、乍然これ等の一切も亦自分の心の中に顯はれてゐる一現象にすぎないものであつて、眞實の我は純主觀そのものこそ眞の我と云はねばならぬ、而て人としての我は此の純主觀の上に影じた一現象に過ぎない我である。乍然實際の生活に於て私共は此の二つの中の何れに多く屬するのであらうか、智としては確に此の大主觀としての我を明に直觀せらるゝのを見るも其の人生の多くは個人としての小我の一生である。然ば私共は今一步を進めて常に此の大主觀の中に一切を見一切を開いて小我の展開を計るべきではないか。而て私共が此の大主觀の中に一切を見來る時、天も地も、山も川も、草も木もあらゆる此の世の一切は自分の心の中の現象であり、活動であるを知り、此の中に於て主客不二、萬法一如の自己なるを知り、眞に活すべき小我の方針も自ら決定して來るのである。所謂大我の中に眞我を見るの生活である。言かへれば大我と小我とが不二体の生活となるのである。佛の心と云ひ、神の心と云ふも要するに此の大主觀の上に現はれたる天地の心を心とするの生活を云ふのである。

見佛に就ての疑難

一、今時の反對者

土屋觀道

念の爲めに光明主義を異安心など云ふ人の所説を聞くに其の主なる所は見佛にある。而て其の難に曰

く「光明主義は主として見佛を主張する、乍然かくの如きは己に法然も之を否定せられ、運慶康慶が造つた佛像程にも之を觀することはできぬといはれてゐる。然に今時の人々がかゝる難行を勧むるは全く其の意を得ないやり方である」と。

乍然これだけを以て光明主義を異安心であるといふならばそれは少しく早計である。何となれば法然は觀佛三昧による見佛は之を排せられたけれども念佛三昧による見佛までも捨てられたものでないからである。「即ち月かげのいたらぬ里はなけれども、望むる人の心にぞ住む」の御歌の如き、又「われはたゞ佛にいつかあひくさ 心のつまにかけぬ日ぞなき」の御歌は見佛についての御歌である。其の他別時念佛について「念佛は見佛三昧を期す、而に遅く見れ給ふ故に疾く見奉ん爲めに別時の念佛を用る也」と又尋常の念佛者も別時の念佛を兼て之を行すべきかとの間に「しかるべきなり」と答へられ、其の別時を兼ねる意は頓に佛を見奉らんが爲めなり」と示されてゐる。又二祖上人も「意に見佛の想を作して但念佛するなり」「一念を立つとは見佛の一念を立つるなり、下の長行に云く佛言く阿彌陀佛眞金色身の光明徹照し端正無比なるを想念して心眼の前に在け、入場の始め心に此の文をかけて念佛すべきなり、正く念佛する時は心には佛見れ給へ、には南無阿彌陀佛なり」と別時の用意を示されてゐる。

然に今時の淨土宗侶に於て見佛を否定するといふことはどこをどう押してゐるのであらう。殊に「尋常の行者も念佛して居たる程に無想到に心が成りたる時佛の見え給ふなり」云々「別時の念佛は定善の念佛なり、始めは散心にて唱ふる稱名に滅罪の益あるが故に見佛の障り滅して定心になる時佛の見え給ふなり」とあるが如きは正しく散心念佛にてもやがては定心の念佛となつて見佛せらるるの理由を示され

たものと云はねばならぬ。

又これを法然上人の一生に見るも六十六にして三昧發得せられしことは宗内の人々も之を認むるところである。三昧發得とは見佛三昧の成就である。其の他法然の臨終の法語にも「吾日頃佛を見奉ること常のことなり」と語られてゐる。又宗門でも臨終來迎を説くことは即ち臨終見佛の是認である。

然に今日の淨土宗侶は何を以て此の見佛を否定し、又別時念佛を批難するのであるか。之恐らくは觀佛三昧による見佛と念佛三昧による見佛との混同であらう。尤も近頃別時念佛によらなければ入信がでないとか、見佛三昧に入らなければ信仰でないとか云ふやうな人々のあるのに對しかゝる反對があるかも知れないが、乍然それとしても淨土宗に於ける見佛と、別時三昧とを否定すべきものではない。

二、今時の見佛者

乍然私共は近頃いはれる見佛論者が悉く宗祖の心に叶へる信者であると云ふのではない。否時によれば無てもかなと思はれるやうなものでもないではない。何となれば今時の見佛主義者といはれる人には未だ信佛の境地さへない人々があるからである。然に宗祖の念佛は信後の念佛であり、信後の別時である而も此のことは一見二者の區別は無いやうであるけれども未だ佛も信することのできない人々が見佛しやうとする佛と、己に佛を信じて一切を任かせた人々が、佛に見えんとするのは其の信佛の前後に於て正に雲泥の差である。

然に未だ佛を信することもできない人が「佛見え給へ」など云へるであらうか。私共は先づそれよりして反省しなければならないのである。従つてかゝる人々がよし眞に佛を見得たと云つてもそれが眞佛

であることを何を以て知ることができるであらう。さればかゝる人々は或は佛の手を見た足を見た、或は佛のルリ光を見たなどと人に向つて云ふけれど、靜に自分に反省すればそれこそすべてが皆偽りであることを自分に知ることができであらう。中にはひそかに智識を訪ねてそれが眞佛かどうかさへ内々尋ねる人もある。乍然、それは未だ佛を信することのできないほど信仰そのものさへ本物でない証據でないか。然に之を聞くものもきくものである。それはきつと本物ですよ、それならばきつと佛です」きく人もきく人だが教ふる人も教ふる人である。然らばそんな方法が全く無信仰なる一種の迷信で單なる幻影を逐ふものに過ぎないことは少く考へれば明なことではないか。何となれば信仰もないものがどうして眞の佛が思はれやう、従つて如何に之を想像しても信することのできる眞の佛が想ひ浮べる理由がない。従つて色々の佛を想像するも、それは自分勝手に作つた想像の佛に過ぎぬ、たまたま木魚などたゞいて一心になつたとき恰も本當のやうな佛の姿でも見、又少々變つた事柄でも見ればそれこそ佛でも見たかと思ふ。乍然それは自分で作つた妄想の佛かさなくばどこかで見た畫像、木像の姿が夢遊狀態の中に現はれたに過ぎぬ。それを之等の區別も分からずして眞佛でも見たかと思ふならばそれこそ大なる誤りである。

三、眞に見佛するには

然ば眞に佛を見るにはどうした時に見るのであるか。それは本願の念佛に乗した時に限るのだ。而て私も此の間に於て永い間を苦しんだ。佛を見るとは佛の姿を見るのではない。況んや畫像を見又木像の佛を見ることでないことはもとよりである。従て又佛の姿を心の中に書くことでもない。然らばどうし

て佛を見るか、それはひとへに如來の大悲を仰ぐ稱名の念佛にある。従て宗祖の法語にもある通り、「別時は定善の念佛なり始散心にて唱へる稱名に滅罪の益あるが故に見佛の障り滅して定心になるとき、佛見給ふなり」で私共の見佛は滅罪の後に自ら見え給ふ佛である。されば私共の念佛はひとへに彌陀の本願をたのみて申す、歸命一行の念佛である。それがやがては巧つともり時かさなりて見佛の域にも至る念佛である。従つて一度信じたる佛には佛の見えると見えないとにかゝわらず一切は之に打任せたる信佛精進の生活である。靜に思へば私も佛を見たいあこがれの時代もあつた、而て又佛を見たと思つて喜んだ時もある。乍然今や今日の私は之等の一切を放鄭して、それよりも更に太なる宇宙の本佛にこそまゝ任せたるの喜びであり、一切を一人で脊つた自覺である。いはゞ如來の大慈光の中にあることを深く信じて、一切を如來の御力と御恵の中にありとして、其の中から常に如來に靈化せられんと念佛するの生活である。従つて今や見佛は自分の念佛がすゝむに従つて自から得らるる自然の賜であり、又淨土往生とは此の慈光に靈化せられた究極の世界である換言すれば念佛の最高の生活が即ち見佛の生活である。従つて西方のみに思つていた佛は今や宇宙の大本源に在しますことを信するに至つた。而して今までは地獄と極樂が別々にあると思つていた考へも念佛の世界にはすべてが光明の世界であり、地獄も餓鬼も畜生も靜に眺むれば皆これ慈光裡中に迷へる人の生活である。今から之を眺むれば私共がそれをさうだと知らなかつたまでである。光明遍照十萬世界は決して昔の法語ではない、今現に輝き給ふ如來大悲の光明である。乍然之を知るものは唯念佛の衆生のみである。(七、一)

おー念佛よ！(五)

山口常照

おー家庭的使命の念佛よ！

現下の家庭生活は潤ふて居るか
温かに魂と魂と抱擁して居るか
夫婦同衾しながらも

魂は離ればなれではあるまいか

老人は今時の若い者とはいふ

若いものは時代遅れかといふ

姑は嫁の心地を考へない

嫁は姑の心地を考へない

親爺は心配そうに考へ込む

姑は捨せりふて寺參する

息子はカフエーになだれ込む

妻は子を抱いて四丈半で泣く

家庭とは名ばかりで

魂はもり／＼ばら／＼よ

寝て食ふだけが家庭なら

宿屋にかはりは更でない

おー魂なき家庭よ

中心を失へる家庭よ

ひからびた家庭よ！冷たく荒れにし

之を思ふとき

家庭を脊負ふて奮ひ立つとき

どうして祈らずに居られよう

どうして念佛せずに居られよう

おー職業的使命の念佛！

世は益々複雑となる

職業なくては生きられぬ

雑多の職業殖えて来る

一たい世の中の人間は

職業を何と思つて働いて居るのだらう

大臣も宰相も知事も村長も

社長も店主も支配人も職工も

職業の使命に目覺めて居るのだらうか

煎じつむれば食ふ爲ではないか

それが贅澤して食ふか貧して食ふかの問題

多くの人はおのが職業を他人扱してからに

都合よく胡麻化さうの一點ばり

店員は主人のすきをねらう

職工は監督の目をぬすむ

同じ官廳に、同じ會社に、同じ商店に

同一仕事をし乍らも

職業に對する魂ははなれ／＼

主人は悩む、主婦は愚痴る

店員はすねる、職工は騒ぐ

身も心も共に苦しみ且つ悩む

景氣に、信用に、交際に

統御に、客の接待に

職業苦のどん底生活

如何にせば此の苦惱より解脱すべき

此れを思ふ時祈らずには居られぬ

至心の職業的使命の念佛は進む

おー國家的使命の念佛よ！

國粹主義、進化主義

平和主義、軍國主義

君主主義、民主主義

國家そのもの、根本方針そも如何

我等も國民の一員として考えざるを得ぬ

國家觀念の分裂

國民の皈依するところ迷へる哉

國家の前途を杞憂するあり

國家の前途を樂觀するあり

思へ國家の魂果してありや

今にして覺めずんば

國家の獨立！獨立の進歩！

憂なきを得んや

今は昔日蓮大士は

國家の前途を憂ふる餘り

立正安國の書を奉り

我は國の柱なりと豪語した

正道に立つ是れ安國の基

國の柱は日蓮一人のみならんや

君は國の柱なり

我は國の礎なり

されど今の國民に

果して此の信念を有せりや

徒なる主義に迷ふて

夢遊病者や幽霊のその如く
腰のすはらざるぞ遺憾なる
使命を感ず
あゝ祈りなきを得んや
國家的使命の念佛は進る

如來我を救ひ給ひぬ

佐藤忠義

うき世の風の身にしむわれが
如來のみ聲にをろき覺めて
南無阿彌陀佛とみな稱まつり
幼兒のごとすがりまつれば
如來われを救ひたまひぬ
いまはなやみのあとだにとめず
み手にわがみをまかせはつれば
うさもつらさもわれにはあらじ
うき世に死するもはた生きをるも
いかなることのまどいくることも
常に眞善美われはあるなり

……一四、五、三〇作……

つしよにやり夜分には黒宮さまの念佛三昧會に加
へていたいき一心に念佛させていたゞいて居りま
す、私の心持ちはうれしいうらありがたいのや
らとても口で云へない氣分です。

光明會の御念佛を稱えさして

いたゞいて 山田とし

私はまことに無學な女で御座います。が佛さまに合
掌させていゝく事は幼い時よりこのんで居りまし
た、しかしなんとなくものたりなさを感じることが
ときどきございました。黒宮さままでお念佛のあ
ることをききました。また光明主義のお念佛を
申されるお方が道を歩きながらも申して居られる
のを見ておかしい氣がいたしましたことも御座いま
しました。がまた「内佐屋の眞野さま」が夜ふけて私
の宅の前をお念佛して御通りになる聲を聞いてを
もはず寢床の上に座つて合掌したことも御座いま
した、このたび不思議の御えんでお別時に加へて
いただきましてほんとふのお念佛がわかりまして
ただうしくてうれしくて私の宅のお佛だんの前で
なきふしました次第でございます。

わが信は世にたくひなし

後藤武雄

わが信仰は絶對唯一の光明なり
わが信仰は世にたくひなき金剛石なり
われは永久に光明のうちにあり
われが如來に合掌し念佛するところ
暗闇よりくる惡靈惡魔も
ことごとく盲となるべし

五、七日入信

入信前の私と入信後の私

後藤市男

私は今年の三月に入信させていたゞいたものです
時日のすぎますにつれてお念佛のありがたい事が
泌々と身にあらわれてまいります
もうお念佛あるのみです。たゞお念佛あるのです
彼れこれと申し上げます事は御座いませんが、し
ひておとい下さいますすなれば

入信前ひごかつた胃病は忘れたやうに全治して今
日では全身に力が満ち満ちて居ります。入信前き
らいであつた農業が人としてこれほどよい仕事は
ないと深く感じまして毎日百姓仕事をお念佛とい

隨感錄

眞我について

楞伽經に「猶伏藏せる室の如く亦地下の水の如
く有りと雖も見えず、蘊中の我も亦然なり。」「女
子の懷胎せるが如く有りと雖も見ること能はざる
中の眞實の我も無智のものは知ること能はざる
なり。」「眞我の説は熾然たること猶劫火の起るが
如く無我の稠林を焼て諸の外道の過を離る、眞我
なしと説くものは法を謗りて有無に着す。」云云

之は原始佛敎の無我觀から一步を進めて眞我の
説に到達したものといはねばならぬ。即ち佛法僧
の三寶に歸依するも此の眞我のあるありて初めて
其の意義ありといふべきである。又曰く、「大般涅槃
は不壞不死なり諸の修行者の歸趣するところなり
」「十方の諸刹土に於ける衆生の菩薩の中の有する
法報佛も化身も及變化も皆無量壽の極樂界中より
出づ」と前者を併せて共に味ふべき言葉である

(念)

虚無時代の詩

眞野 志 岐 雄

凡べてを
否定しつつしてゐる私に
何物か現はれて呉れ、
私をうるほして呉れ。

私は何物かを
信頼せずには生きて
行かない。

根づよい虚無。

私の心は
求めてゐる。

私はあまりにだまされ過
ぎた。

この人こそ。

私はこびる様にその人に近

づいて行く。

その人も矢はり普通の人間で

ある。

私は二倍の苦汁をなめて引き
さがつて来る。

ふたたび

誰も信ずまい。

ひとりぼっちだ。

生れて来たこと自体が
不幸なかも知れない。

私は嫌人的な生活を
送つてゐる。

而し、

誰も一人信頼することが
出来ずに生きて行くことは寂
しい。

誰か心から信頼する人が現

はれて呉れ。

私は

私は破滅のどん底に

落ち乍ら

尚何物かを掴み出そうと
あせつてゐる。

血塗れになつて――

私は浅ましい煩惱をさげす
ますにはゐられない。

この手紙が私の差し上げる
最後になるかも知れない。

いくら生きてゐても

限りがない。

今日よりも

尙明日苦しみとしたなら

私は何故に生きてゐるのか。

永遠に虚空を包む

灰色の虚無。絶望。憎み。

入信二章

眞野 志 岐 雄

みおやよ。

吾が心に、

在すことを

氣附かざりし。

われは

すがらむ

幼児の如く――

ああ

永遠にすがらむ

幼児の如く――

青葉六月

青葉六月

法悦に打ちふるふ

身はかるく。

身はかるく――

夕靄の

さん／＼と若葉に降るに

木魚の音は清く

青葉六月

法悦に浸る身は

かるく

心は聖し

草むしり

佐 藤

朝かせそよみ果樹園に

今日も今日とて草むしり

梅や杏や桃の實は

枝もたわにみのりける

すべては如來の思籠よ

これらの果樹は亡き親が

子が放浪の旅の間に

故郷に歸る目を思ひ

植ゑぞでたゐるものなるよ

植ゑにし親の死にし後に

迷へる孤兒は古郷の

小路たどりに歸りけり

今日は果園の草むしり

一草ぬいては南無とよび

一草ひいては阿彌陀佛

みをやをよびては草むしり

むしる草葉に落つ涙

歎喜にあふるゝ淨き涙

この世を去りしわが親が

淨きみの國に攝取はれて

方便の世の因果にて

大慈大悲にすくはれし

聖意を感謝したてまつる

親と子とのよみこびが

もつれあひては出る涙

南無阿彌陀佛のうれしさよ。

内観如實

ありのまゝ

北越にて 氏 川 俊 徹

朝ごとに掃除すれども塵が出る おのが心もかくの如きよ、
稱ふれば法の光に照されて 醜きおのが姿に泣く、
静めんとすればするほど亂れ出る おのが心のあさましきかな、
み佛の尊き姿ふしおがみ おのが造りし罪ぞ悔ひなん、
み佛の誓ひの船にうちのらば 荒き波風心にもせじ、
うれしき

み佛のお慈悲の庭に恙なく 佛法を學ぶ今日の嬉しさ、
わがために朝な夕なに友となり 護り給へる幸ぞ嬉しさ、
み佛にもらへし菓子をみちすがら 子等に與へて嬉しかりけり、
只申せ必ず救ふみ佛は あまり嬉しく涙こぼるる、
またゝきの間に心執られず につきぬ嬉しさ願ひ求めん、

唱名念佛歌

氏 川 俊 徹

南無阿彌陀助け給へと唱ふれば 彌陀は迎ひにみゆるぞうれし
むかしより迷ひきたりしおのが身も今ぞ救ひの船にたよらん
あたゝき佛の胸に抱かれて はやく參らん聖きみ國へ
みだたのむ心を常に變らずは 死ぬも生きるもわすらひはなし
たのみなは佛も我もなかりけり 親子名のりのみ名のひとこる
佛菩薩朝な夕なは友となり まもりたまへる幸ぞうれしき

私の昨今

一六 觀 道

春だ春だと思つてゐるまに、もう夏のためつかりも近づいて來たやうです。道友の皆さまに御變りも在らせませんでせうか。静にこうして筆とれば一層になづかしさのいやますのを覺えます。次に眞生も目にまし愛交の友として各地に讀者を加へつゝあることを喜んで居ます。讀者も千名以下を降つたことはありません、雜誌といへば單なる小冊子に過ぎないやうでありますが道を愛する眞人の上なき心の友かと思へば滿洲朝鮮を通して千人の讀者があるといふことはほんとうに心強い感じがします。願くは皆様の中にも信仰に關する自由の原稿を投書して下さいませんか、俱に思想信仰の交換にも

なつて一層お互に利する所も多からうと存じます。

次に私の近頃は再び元の健康に歸りまして本月の中頃から又々傳道に専らしていただくことになりましてから乍他事、何卒御安心下さい。實はこの一月以來少々脚氣を患ひまして、永く健康を害して居りましたが、思い切つて二ヶ月許りの節養で再び健康に歸らし九州には商船で別府に上陸していただきました。乍然幸いにも美和子の父さん尼崎の圓平寺さん其の二ヶ月許りの休養が私共一家も一緒でした。わざと日向の方ににとつてはまたとない至幸をもた廻り人吉を経て熊本にも立寄りもらしました。それは永年の間の宿したなつかしき古郷よ！永い間私

を保育してくれた古郷よ！と涙の中に郷里の自然に親んだのも此の時でした。老いた村人の姿に哀れを感じたのも此の時でした、永くもない人生の一生に於てかうしたなづかしい旅がまたとあらうかも涙を流したのも此の時でした。之もミオヤの御恵みです。

◇六月號眞生は都合上休刊
◇誌代次號に 眞 生 社

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社
編輯兼 東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行人 土 屋 觀 道

東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷人 三 井 清 次
東京市芝區三田四國町二番三號
印刷所 玄々堂印刷所

唐澤別時三昧會案内

一、時 七月二十二日より七日間

前日まで集ること

□注意

七月二十一日夕方までに上諏訪町法光寺様に集つて下さい共に登山しませう

東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所 眞 生 社